

人間が暮らす都市と土木工学



青山彰久
論説委員会アドバイザー
ジャーナリスト
(元読売新聞東京本社編集委員)

東京オリンピック・パラリンピックの開幕まで 500 日を切った。世界中のアスリートが力と美しさを競う姿を今から楽しみにしている人も多いだろう。しかし、どうもしっくりこない。世界中の目が日本の大都市・東京に注がれるこの五輪が、都市生活に何を残し、世界にどうアピールするのか、それが見えない。ビジネスだけに目を奪われて、新しい時代を目指す都市の構想が希薄のように思えてならない。

都市とは何か。学問の領域が細分化されて全体が見えにくいいま、総合学問としての土木工学の使命を考えずにはいられない。土木工学には、豊かで快適な人間の生活と社会活動を支える基盤整備を担ってきた「市民生活のための工学」(シビル・エンジニアリング)として、「人間にとって住み心地よき都市」を中核的に構想するミッションがある。

例えば、高層ビルを林立させて土地利用の高度化を促す都市再生特別措置法ができて 17 年。その政策は 2011 年の法改正でさらに加速され、東京都心では、風景が一変するほど高層ビルの建設ラッシュが続く。「ポスト五輪時代」を視野に入れ、高さ 390 メートルのビル計画まで進んでいる。「豊かさの象徴」として都心に高層ビルを次々に建てるのもいいけれど、都市に暮らす人間にとって豊かさを実感できる都市再生とは、街の真ん中に歴史的な建物が保存され、心安らぐ街並みが続き、たっぷりとしたオープンスペースが復活することではないだろうか。

今度の五輪が開催される真夏の東京を想像する。打ち水をしてもちまち蒸発し、コンクリートのジャンクルがもたらすヒートアイランド現象によって朝晩も気温が下がらない灼熱の日々になるだろう。

「元来、アジア・モンスーン地域に位置する日本の都市は、夏の暑さを念頭に整備されてきた。江戸や大坂では水路が縦横に張り巡らされ、それが風の道にな

って海風を街中に運んできた。窓を開け放てば家全体を風が吹き抜け、自然に抱かれた涼しさを感じさせた。それが明治以降、……コンクリートで街を固めた。この路線を極端に進めたのが、前回の東京五輪の時の都市改造だった」。筆者にそう語り続けていたのは元建設省河川局長の尾田栄章氏である(「論点」『読売新聞』2013 年 10 月 10 日朝刊)。

たしかに、都市整備を急ぐあまり、河川を覆うようにして首都高速道路を建設し、小川には次々と蓋をかぶせた。江戸のまちの遺産を食いつぶすような都市改造だった。前回の五輪が開催された 1964 年の東京にはそれが必要だったのかもしれない。だが、2020 年に必要なのは、自動車交通を減らし、水辺を取り戻し、空を広くし、環境を破壊せず自然と折り合って生活する豊かな都市の再生、グローバル化に揺れる時代でも人々の暮らしを確実に支える「維持可能な都市」のビジョンだった。今回の五輪開催は、こうした次の百年の都市改造を目指す端緒にしてほしかった。

都市とは、ビジネスの場であると同時に、人々が暮らす場である。そして、資本・労働力・商品・情報が集積するだけでなく、多彩な才能・独創的な企業・知の武器庫としての大学が集まり、新しい文化の創造を準備する苗床なのである。それゆえに、20 世紀アメリカの都市学者ルイス・マンフォード(1895-1990)が都市史の名著『都市の文化』(1938 年)で論じたように、都市とは「ともに生活するための物理的施設であると同時に、人々が好ましいと感じる環境の下、集団として掲げた目標と合意の象徴であり、言語と並んで人類が作り上げた偉大な芸術作品」なのである。それぞれの時代の文明を映す鏡のような存在、それが都市だといってもいい。

かつて林学からアプローチして明治神宮の森や日比谷公園などを造営した本多静六(1866-1952)、造園家として神宮外苑のマスタープランを策定した折下由延(1881-1966)など、近代東京の先達者は時代精神にあふれた都市の建設者だった。次世代の若い土木工学者たちはこうした歴史を学び、AI を取り入れたスーパーシティ構想もいいけれど、もっとリアルで住み心地のいい都市を、様々な知と連携しながら整備するミッションがあるように思う。